尾籠の六地蔵と庚申塔

文化財保護委員
委員長　渡邉照義

今回は、一の宮町手野の尾籠地区にある六地蔵を紹介します。

六地蔵とは、全ての生命は6つの世で生まれ変わりを繰り返すという仏教における「六道輪廻」に基づいたものです。6つの世界（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の六道）で苦しむ人々を救うために、仏様が六道に応じて、地蔵の姿となってそれぞれ現れるという信仰から彫られたものです。

尾籠の六地蔵は、正面は主護神2体で、他の3面に2体ずつ計6体の地蔵が刻まれています。

地蔵信仰は、日本では平安時代中期頃から発展し、尾籠の六地蔵は室町時代に建立されたと思われます。

▶尾籠の六地蔵

▶正面に刻まれた主護神

昔、尾籠に西音寺というお寺があったと伝えられており、その入り口付近に建てられたものと考えられます。

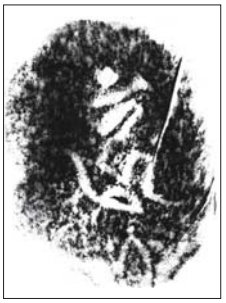
六地蔵の個々の名称や像容は諸説あって一定しておらず、檀陀地蔵、宝珠地蔵、宝印地蔵、持地地蔵、除蓋障地蔵、日光地蔵が六地蔵に称されているのが一般的です。

地蔵は合掌した姿のほかに持物として錫杖、宝球、子を抱くものなど多様です。

尾籠の六地蔵の石塔は、上から宝球・笠・龕部・中台・憧身・基礎といった部分から構成されています。憧身の表面には東西南北に面して一文字で如来を表す梵字（古代インド文字）が見られます。また左側には庚申塔が建てられています。庚申信仰と習合したものと考えられます。

昭和53年9月17日に一の宮町指定文化財となりました。（現在、市指定）

憧身部分に刻まれている梵字


阿閦如来（東）

阿弥陀如来（西）

宝生如来（南）

不空成就如来（北）

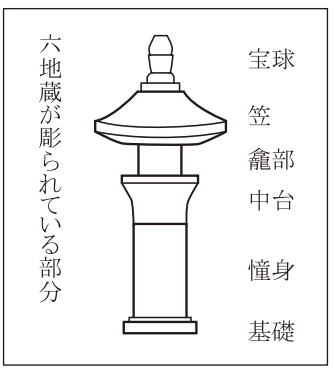
庚申信仰

60日に1回めぐってくる庚申（かのえのさる）の日をめぐる信仰で、中国から伝来した道教に由来します。

道教では、人間の体内に三尸（さんし）と呼ばれる虫がいて、庚申の日に眠ると三尸が体から抜け出て、天帝（天の神）に人間の罪悪を告げて寿命を縮めるとされていました。そこで三尸が抜け出るのを防ぐために、庚申の日に夜通し眠らないで宴会などして祭りを催したのが信仰の始まりとされています。

夜通しの祭りを庚申講といい、一般に庚申講を3年間18回続けた記念として庚申塔が建てられたといわれています。

▶庚申塔



▲石塔の構成図